

『古事談』卷二・第21話考 補遺

松本 昭彦

今春発行予定の「国語国文」に、「作られた八詩識——『古事談』卷二・第21話考——」と題して、藤原頼長の説話に関する拙論（以下、別稿）を掲載する予定である。そこで論じ残した問題の一つについて、小稿でいささか見通しを述べてみたい。

さて、考察の対象とした説話は、以下のようなものである。

近衛院の御時（小六条内裏）、宇治左府参内する間、山上に大袋有り。其の袋動きたり。隨身を以て見らるる处、袋の中に人有り。之れを開きて見るに中将行通朝臣なり。袋を出でて共に咲ひて退散し畢ぬ。

此の事は、殿上人遊戲のあまりに、頭中将教長の宿所において為通朝臣鏡を見て、「にくし、うつくし。為通が鼻はうつくしき鼻かな。後の鼻にしたりともわるからじ。殊勝殊勝」と自愛せられけるを、師仲朝臣、「さる后鼻はあらじぞ。希有の鼻なり。まがまがしき后鼻かな」と云はれけるに、行通も口入する間、「我れ様なるちひさき人は、袋などに入れてばや」とて、袋の有りけるにつかみ入れて「人々、御共にまわれ」とて、為通、袋を持ちて山の方ざまへ出でて遊行せしに、扈從する人は、師仲・

公重・教長・顕広（俊成なり）。此の間、左府参らる。前声に驚きて袋を山上に棄てて逐電すと云々。

仍つて件の日の左府の日記に云く、「今日参内す。懈怠の番衆は袴を着きながら池に立ち、凶悪の小臣は袋に入れられて山に有り」と云々。

『古事談』（新日本古典文学大系）

別稿の結論をごく簡単に箇条書きすれば以下のようである。

① 出来事及び頼長の日記記事いづれも虚構で、頼長の運命の不思議を説明するために、以下のようなプロットを組んでいるものである。

② 藤原為通は、前年自分の妹が近衛天皇の中宮になったことを鼻にかけ、自分の鼻を「うつくしき鼻かな。後の鼻にしたりとも悪からじ」と自慢した。為通の異母妹「呈子」の入内は、頼長と兄忠通の対立の象徴であり、保元の乱の遠因となる。

③ 藤原行通が袋に入れられたのは、七歳未満の幼児が亡くなった際には、正式な葬儀は行わず、袋に入れて山に遺棄した風習を前提に、行通の「小ささ」を揶揄するためであった。

④ 藤原頼長は、その様子を日記の中で「凶悪の小臣は袋に入れられて山にあり」と批判したが、「凶悪の小臣」とは、保元の乱を起こした頼長自身を意味してしまう言葉であり、保元の乱の末に、奈良の般若山に遺棄葬のかたちで葬られた自身の最期を予言するものに読めてしまう。

小稿では、別稿で「今のところ手がかりがない。……本稿では考察の対象からはずすこととする」とした、頼長の日記『台記』（とされる）記事の一部、

懈怠の番衆は袴を着き乍ら池に立ち
という文言について考えてみたい。

新大系の脚注では、この文言について、

この事実は未詳ながら、教長の宿所に遊戯した、役にも立たぬ（＝懈怠）集り、一つがいのバカドモという、軽蔑を籠めた表現で、為通・師仲・公重・教長・顕広を指し、たちの悪い（＝凶悪の）下賤者、行通と対句に、頼長の賤しめ貶めた物言いではないか。頼長の前駆の声に逐電した時、あわてて南庭の池に踏み入れてしまったかとされる。

この解釈に概ね賛成である。少し付け加えるならば、当時、貴族が宮中に宿直する時は、「宿直装束」という服装で行っていたが、『角川古語大辞典』「宿直装束」の項に、

平安時代、貴族が宮中に宿直するときに着る装束の意で、略式の朝服に用いられた衣冠にほぼ同じ。袍に指貫を着、扇を持つ。『雅亮装束抄・二』に「とのゐさうそくといふは常の衣冠なり。指貫・下の袴つねのごとし。その上に腋あけをきて、狩衣の帯をするなり。しりのかけやうは束帯に同じ。着まへもたけとひとしくきすべし」とある。

とあるように、それは「指貫袴」を着るのが通例であった。説話中でわざわざ「袴を着き乍ら」というのは、この「宿直装束」を着ていたことを言うのであろう。

問題は、『台記』記事（とされる）文言の後半が、この時の行通の様子と保元の乱での頼長自身の最期とが二重写しになっていたように、この教長らが袴を着たまま池に嵌まったことが、保元の乱の際のこととどのように重なるか、ということである。そこで、保元の乱の際の教長の装束を見てみると、

院（崇徳）も左府（頼長）も御鎧を奉る。教長申されけるは、「あるまじう候らん。

御物具召され候ふ事、あしかりなん」と申されければ、院は御鎧をぬがせ給ひける。

左府はなをたてまつりたり。白綿の狩衣に糸火威の鎧をぞ召したりける。教長卿・成雅ばかりぞ、水干袴に腹巻をぞきられたりける。是はたかはんにはあらず、ながら矢のおそれの為なり。上北面に師光・家長・頼助は、狩衣袴の上に腹巻をぞきたりける。武者所の衆は、仰にて、皆甲冑を帶したり。

『保元物語』（新大系）

のように、教長は「水干袴」を着ていたのである。この事は、頼長・教長たちの敵である後白河天皇方の平清盛・源義朝らも「水干小袴」を着ていたことから、珍しいことではないが、戦闘時の一つの装束であることがわかる。

晩頭、左府宇県より参入す。前馬助平忠正・散位源頼憲、各軍兵を發す。偏に合戦の儀をなす。時に上皇・左府額を合わせて議定す。左京大夫教長同じく御前に候ふ。

夜に入りて清盛朝臣以下各甲冑を着て軍兵を引率す。清盛朝臣は紺の水干小袴・紫革ハ□□□□□冑を着る。常陸守頼盛・淡路守教経・中務少輔重盛、同じく武装を備え相ひ従ふ。義朝赤地の錦の水干小袴を着る。頼政以下各々思ひ思ひ。多く紺の水干小袴を用いる。或いは生絹を用いる。皆冑・折烏帽子を蒙る。

『兵範記』保元元年七月十日条（増補史料大成）

それでは、「池に立つ」とはどういうことであろうか。これは想像でしかないが、保元の乱の際、頼長・教長らが拠った白河殿が源義朝によって夜討ちで火を掛けられたことが関係するのではないだろうか。結局、白河殿を諦め、逃げることになるのだが、しばらくは池の水で消火を試みたと考えるのである。当然、袴を着たまま池に入って水を汲むことになる。

また、当時、火災の消火の際には、袴を着た。

或いは此くの如き焼亡の時、或いは臨時の邂逅へ山大衆公家のために騒ぐVの時、火長小袴を着る。人以て之を美と称す。

『清癡眼抄』（群書類聚・第7巻）

保元の乱の際の記録はあまり残っておらず、このようなことを直接記す文献も管見に入っていないが、『台記』（とされる）記事の前半についても、教長の行動として、説話事件の際と保元の乱の際が二重になりうるのである。

以上、別稿で述べられなかった点について、一つの見通しを示してみた。もっと確かな証拠が出てこないと確実には言えないのだが、別稿で示した読みの蓋然性が少しでも高まることにつながればよいと思う。